

ビッグ・バウンス

2004(平成16)年11月21日鑑賞(ホクテンザ2)



監督=ジョージ・アーミティジ/出演=オーウェン・ウィルソン/サラ・フォスター/モーガン・フリーマン/ゲイリー・シニーズ/チャーリー・シーン (ワーナー・ブラザーズ映画配給/2004年アメリカ映画/88分)

……ビッグ・バウンスとは、大ボラという意味。多くの犯罪歴をもった流れ者の男と大金持ちの愛人をつとめている(?) 美女が組んでワイロ用の資金20万ドルを奪うというのがミソ。アメリカでは超有名なエルモア・レナードの原作をもとにした面白いストーリーは、二転三転そして四転五転。頭の体操として楽しめる佳作として紹介しておこう。

第5章

映画のよしあしは俳優で決まる!

ビッグ・バウンスとは?

この映画の原題は『The Big Bounce』。「bounce」とは本来は跳ぶ、はねるという意味の動詞だが、俗語として「ほらを吹く」という意味がある。したがって、ビッグ・バウンスとは大ボラのことで、この映画のテーマは誰が一番の大ボラ吹き(bouncer)かということ。そして、そのホラのテーマは、20万ドルという大金の強奪作戦!

ほら吹き(?)の主人公その1——ジャック・ライアン

映画の舞台はハワイ。地元住民の反対運動にもめげず、強行にリゾート開発を進めているのは怪しげな不動産屋のレイ・リッチー(ゲイリー・シニーズ)。この映画の主人公であるジャック・ライアン(オーウェン・ウィルソン)は、たまたまこの工事現場で働きながら、住居侵入・窃盗のいい仕事がないかと考えているちょっとしたワル(?)だが、陽気で明るい好青年……? 映画の冒頭、こんなジャックが現場監督のルー・ハリス(ヴィニー・ジョーンズ)とケンカになり、

野球のバットでルー・ハリスのアゴをぶちのめすことに。こりゃかわいいそう！

ほら吹き（？）の主人公その2——ナンシー・ヘイズ

とびっきりの美女で、黄色いビキニがハワイの海辺にピッタリ似合っている女、ナンシー・ヘイズ（サラ・フォスター）は、レイ・リッチーの愛人らしい。ところがそのナンシーは、ジャックに意味ありげなウインクを見せて、ジャックと何やら密談を……。その内容は、何とレイ・リッチーがリゾート開発のためのワイロ用にため込んでいる資金20万ドルを奪おうというもの？ 果たして、半分色仕掛けで迫ってきたこのナンシーという女は信用できるのだろうか？

ほら吹きの主人公その3——ウォルター・クルーズ

3度もアカデミー賞にノミネートされた熟年の大俳優モーガン・フリーマン扮するウォルター・クルーズは、ビーチサイドのバンガローの経営者であり、パートタイムの地方判事という身分。ジャックがバットでレイ・リッチーをノックアウトさせた姿を見て、ジャックに興味をもったウォルターは、映画の中でいろいろな役割を演じているが、結論として彼は別にほら吹きではなさそう。果たして、このウォルターの本当の姿は……？

リッチーの部下はバカばかり……？

今ハワイで大規模なリゾート開発を進め、大もうけを狙っているレイ・リッチーは、そのイメージ通りのアカ抜けしない成り金趣味の男。現場監督をバットで殴ったジャックは、島を出ていくことを条件に釈放されたはずなのに、なぜ島に残っているのか？ そのうえ、なぜジャックが「オレの女」であるはずのナンシーと一緒にいるのか？ リッチーの頭では納得のいかないことばかり……。

このリッチーの忠実な部下がボブ・ロジャース Jr.（チャーリー・シーン）。ボブ Jr. は、リッチーの命令をジャックに伝え、その後も何かとジャックやナンシーを監視しているが、いつもウラをかかれてばかり。もともと単純な男だから、ナンシーがジャックと2人でベッドの中に入っている家を訪れても、うまくナンシーにあしらわれる始末。ヒゲをはやしカッコをつけていても、こりゃダメだ……。

原作者は有名なミステリー作家！

私は全然知らなかったが、パンフレットによればこの映画の原作者であるエルモア・レナードは、大正14（1925）年生まれの大作家とのこと。だから、日本でいえば松本清張のような大作家。とはいっても松本清張のような社会派作家ではなく、ミステリー界の巨匠として1980年代半ばにレナード人気が弾けたらしい。そしてレナードの名前がクローズアップされたのは、クエンティン・タランティノー監督による『ラム・パンチ』（92年）の映画化で、今や40近くある彼の小説のうち35作品が映画化もしくは映画化のオファーを受けるほどの大作家になっているとのこと。さらに彼の小説の特徴は、松本清張のような重々しい社会的テーマではなく、「歯切れのよい自然な会話で定評があり、人間の失望や絶望、温かさや潜在的ユーモアを、独特のリズムで結びつける才能では右に出る者はない」とのこと。またこの『ビッグ・バウンス』は2度目の映画化で、1969年に全米公開された第1作『悪女のたわむれ』はどうもレナードの眼鏡にかなわなかったらしい。しかして、ハワイの海と海辺の豪華な別荘を舞台とし、サーフィンを小道具として、シャレた20万ドルの強奪作戦を楽しく描いたこの第2作の出来は、原作者にどのように評価されたのだろうか？

騙しあいとナンシーのビキニ姿を楽しもう

この映画は深く考えて観る必要はない。「犯罪のカゲに女あり」とは昔からよく言ったもので、20万ドルの強奪作戦をめぐるキーウーマンは何といってもナンシー。男たちはおおむねみんなこのナンシーに振り回されるが、果たして主人公のジャックは？ 男たちを手玉にとるナンシーのテクニクは私などには到底わからないが、そりゃ見事なもの。ここでもやっぱり、「女はコワイ！」という私のいつもの感想を述べなければ……。もっともジャックもさるもの！ 最後のシーンでは、思わずエー……とうなること請け合い。ああ面白かった！

2004(平成16)年11月22日記